

## 学会印象記

### 第19回国際 AIDS 会議 (ワシントン DC) 参加報告

高田 知恵子

*Chieko TAKATA*

秋田大学教育文化学部

2012年7月21日、ワシントンダレス空港に降り立つと半旗が掲げられていた。コロラド州オーロラでの銃乱射事件への弔意であった。被害者・遺族を慰めるためオバマ大統領は現地に飛び、ワシントンDCには不在だった。そのようななか、第19回国際エイズ学会(以下、学会)は7月22~27日の間、22年ぶりにアメリカ、首都ワシントンDCで開催された。HIV陽性者への入国規制撤廃はブッシュ政権に始まりオバマ政権になって完成された。だからこその開催であると多くのスピーカーが言及していた。テレビやワシントンポスト紙も銃乱射事件の次くらいに大きなニュースとして学会を取り上げていた。ワシントン市内の地下鉄駅、地下鉄車両には学会関連の写真やメッセージが数多く掲示され、街には学会のフラッグが掲げられて、街中が学会歓迎のムードとなっていた。

会場のWalter E. コンベンションセンターは巨大な建物だった。全体に大きくてにぎやかな学会だったが、あまり混雑することもなくゆったりしていた。ホールやロビーにソファや椅子がほとんどどなくて、参加者はカーペットの上に腰をおろして足を投げ出し、プログラムをチェックしたり、PCをたたいたり、飲み物を飲んだり、とりリラックスした雰囲気であった。ワシントンDCのナショナルモールに広げられたメモリアルキルトの写真を見た方も多と思うが、今回も多数のキルトが巨大なセッションルーム1の壁に掲げられていた。個人個人の人生やところが縫い込められたキルトには胸に迫る力があり、エイズの歴史をも感じさせた。プリーナリーセッションに登場したヒラリークリントン国務長官も「当時ビルと私はこれらのキルトを見に行ったものです。」としみじみ語っていた。

閉会後の学会HP<sup>1)</sup>によれば、今回の参加者は23,767名、地元アメリカ人が約半数、参加国は183カ国、抄録掲載は3,837編、セッションは194、プリーナリースピーチは19であった。グローバルビレッジは地階の広大なスペースに設けられ、265団体のブースなどがあり、ユースパビリオンもこの中にあった。アートの展示スペースやダンスや歌のステージもありさまざまな方法で表現し訴えていた。

今回の学会テーマは“Turning the Tide Together”であった。ともに潮流を転換させて、これからは“AIDS Free Generation”

が出現し、“End AIDS”は絵空事ではなくリアリティを持って言えることだと、どのスピーカーも強調していた。

オープニングセッションではIASのDr.カタビラの挨拶のあと、地元ワシントンDCのグレイ州知事は歓迎挨拶とともに「昨年、ワシントンDCでは母子感染が1例もなかった!」とこれを喜ばしいニュースとして報告していた。アフリカの20歳の女性が「アメリカのお陰で治療が受けられ回復した」と述べ、さらにHIV陽性の母親から産まれたHIV陰性の娘は「母が適切な治療を受けたから私は陰性。他の子どももみんなHIVフリーで生まれてほしい」と訴えていた。国連事務総長、フランス大統領はビデオで登場し、エイズの予防・ケア・サポートが重要であり今後も力点を置くそれぞれスピーチしていた。世界銀行のキム総裁は「エイズと貧困の終焉」というタイトルで、「エイズは医学だけの問題ではなく経済的・社会的問題である。世界銀行は各国の健康システムと社会保護システムを支援する」と数値や実例をあげながら情熱をこめて話した。どのスピーカーも魅力的な話術を余すことなく披露してくれて、聴き応え、見応えがあったが、終了時間は大幅に延長となった。

前日からプレコングレスが開催され、その一つNIH主催のセッションは盛況でNIAIDのDr. Fauciなど蒼々たるメンバーがHIV治療の進歩へのNIHのこれまでの貢献について述べていた。そのなかでもクリントン国務長官が昨年11月にNIHを訪問したことを高く評価しエイズ対策は医学、政治との連携が欠かせないと訴えていた。

23日朝のプリーナリーセッション“Ending the Epidemic”で最も拍手が大きかったのはヒラリークリントン国務長官登場の時だった。登壇して笑顔を見せるだけで場の雰囲気が華やかになるのは彼女のカリスマ性だろう。「アメリカはエイズ対策に引き続きコミットしていく。AIDS Free Generationを創出させるために進んでいく。PEPFAR (The U.S. President's Emergency Plan for AIDS Relief)<sup>3)</sup>のねらいは緊急性からサステナブルな健康システムを作り出すことに移行している。科学的エビデンスに基づく、経済効率のよい方法で研究と実践を進め、リーダーシップをとって政策としてエイズエビデミックを終わらせるよう進むべきだ。こ

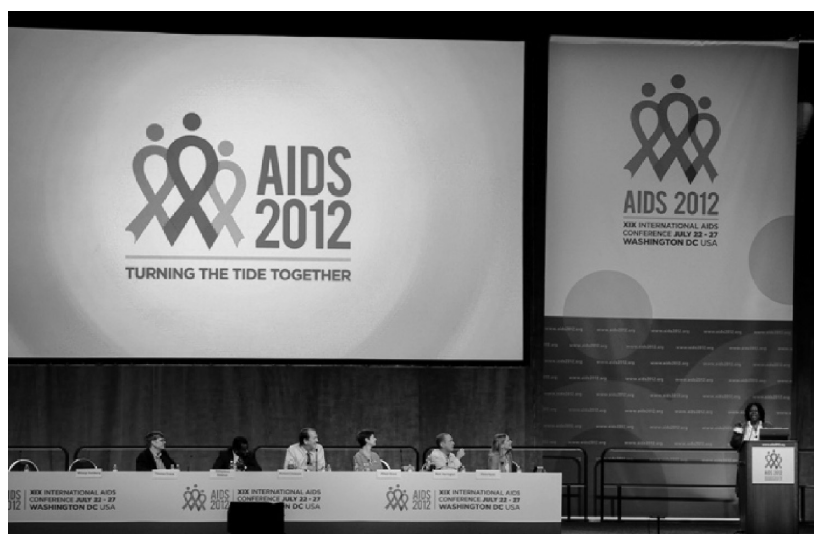


図 1 セッション風景<sup>4)</sup>



図 2 メモリアルキルト展示<sup>4)</sup>

れは勝利できる闘いだ」と力強く述べた。つづいて行われた HIV 対応における効果と効率の改善に関するシンポジウムでは、ビルゲイツ、世界銀行のキム総裁、PEPFAR の Dr. グースビーらが、限られた資源のなかでどう優先順位をつけるかについて討論した。ビルゲイツは「2003 年にはアフリカのほとんどの人は治療に手が届かなかった。今は支援の効果や効率を考えることができるというのはすごいことだ」と述べ、これまで 14 年間の支援をふりかえった。「予算が厳しいほど人は工夫する。結果として大きな効果があがることはよくある」というキム総裁の発言はなるほどと思わせた。

心理社会的サポートの領域では、メンタルヘルスについ

でのセッションに参加した。HIV 陽性の子どもを持つ母親は非陽性の子どもを持つ母親よりストレスを感じているという発表や HIV 陽性児のきょうだいは悲しみや喪失を体験し、親役割を取ることもあるという発表を聞いた。これらの知見は HIV だけではなく他の疾患についても同様のことだが、HIV であればより深刻になることもあると感じた。また、フロアからは中央アジアでエイズ孤児の養護施設を運営している男性が「クリントン長官の発言は素晴らしいが、現実はまだまだだ」と現状の困難さを訴えていた。潮流は大きく転換していると思える面と、困難さは変わらないと思える面の両方を感じさせられた。

ユースパビリオンで行われた、若者へのアプローチに関



図 3 ヒラリークリントン国務長官<sup>4)</sup>

するセッションでは、青年期はたいへんな時期であり混乱しているのが当たり前、そのような年代の人々へのアプローチの難しさ、それをいかに克服するかで討議がなされていた。アメリカであれ、アフリカであれ、どの研究発表でもきめ細かいアプローチが必要という点で共通していた。この分野での発表者の多くは女性で、日本と同じだと思いつながりながら聞いていた。ユニセフの Gupta 事務局次長がコメンテーターとして登場し各研究を高く評価していた。

HIV 開示についてのセッションでは、HIV 陽性者が学校や職場で HIV の開示をした体験を語ってくれた。ある女性は親が弁護士を伴って学校に伝えたという周到な開示を提示し、またあるトランスジェンダーの女性はそのときの状況で思いがけず話してしまったなど個人個人の開示が語られた。どの開示においてもメリットとデメリットがある。「今アメリカに住んでいるのでここでは開示しているが母国ではしていない」という青年に「フェイスブックで開示しているのにな?」「そうだね、そこまで考えていなかった」などの率直なやり取りもあって微笑ましかった。フロアからも続々と「私もポジティブ。こんな経験をした」と語っていた。守られた安全な空間だからこそ、このような発言がスムーズに出たのであろう。彼らは、本当はもっと話したいのだと強く感じた。

加齢のセッションも盛況だった。エイズ患者の報告からすでに 30 年以上経った。若者も年をとって環境や自身の体調も変化している。さまざまな課題がどの国でも生じている。

学会のさまざまな場面で女性、MSM、トランスジェン

ダー、セックスワーカー、IDU、刑務所にいる人などが恩恵を受けられるように支援すべきだと強調されていた。またセッションテーマはスティグマ低減、ワクチン、マイクロバイサイド、医学的割礼、予防としての治療、経済効率のよい介入、ターゲット集団への効果的アプローチ、予防への行動変容等々、多岐にわたっていた。そのなかでも HIV と他の疾患との合併が大きな話題となっていた。最終日のセッションでは、フランスの Dr. Harries が結核と HIV のテーマで、結核の兆候を発見する方策や、結核を制することが HIV コントロールに重要であるなど述べた。また UCLA の Dr. Currier はがんなど非感染性の疾患も HIV 陽性者にとってはそうでない人たちよりも影響を受けやすい、身体によい生活習慣を行うことがよい結果につながると話した。Dr. Fauci は「AIDS Free Generation を目指すが、それは自然に HIV がなくなるということではない。われわれすなわち国、コミュニティ、個人が責任をもって実行を決めて取り組んでいく必要がある」と述べた。今回の「Turning the Tide Together」のために実行すべき事柄が、ワシントン DC 宣言<sup>3)</sup>として、①狙いを定めた新しい投資、②エビデンスに基づく予防・治療・ケア、③スティグマや差別を止める、④ HIV 検査相談と予防・ケア・サービスの拡充など 9 項目あげられた。

オープニングセッションで隣に座ったタンザニアの青年医師と話をした。筆者が心理カウンセラーと自己紹介すると、彼は「メンタルケアも含めた医療全体と予防啓発などをプランする事業に携わっている。JICA のスタッフにも会ったことがある。欧米と行き来して専門家同士の連携をしている」と誇らしげに話していた。将来有能なリーダーになる人材だと思えた。エイズ対策を通してアフリカと欧米とのパートナーシップが構築され、アフリカに優秀な人材が育っている。今回の学会では、アメリカのお陰でアフリカ人は薬が飲めるようになったと開催国アメリカへの感謝が多く述べられていた。Africa と America ふたつの A・frica は素晴らしいパートナーというアピールを感じたが、そう感じたのは筆者だけであろうか。日本も資金提供だけでなく、顔の見える、人同士のつながる事業を今以上に展開していくことが、今後世界のなかで生き延びていくために必要なのではないかと感じた。そしてそれを日本の人々にもしっかりと知らせることが HIV 啓発にもなると思えた。暑い気候のなかの熱い学会であった。

## 文 献

- 1) <http://www.aids2012.org/>
- 2) <http://www.pepfar.gov/>
- 3) <http://www.2endaids.org/>
- 4) <http://aids2012.smugmug.com/>